

第6回徳島文化芸術ホール（仮称）  
管理運営計画検討委員会 議事概要

<開催要領>

- 1 日 時 令和5年1月30日（月）13：30～15：30
- 2 場 所 ホテル千秋閣
- 3 出席委員 藤野委員長、吉本副委員長、浅香委員、小澤委員、佐々木委員、真田委員

<会議次第>

- 1 開会
- 2 事務局説明
- 3 議事
  - （1）徳島文化芸術ホール（仮称）管理運営計画（案）について
  - （2）その他
- 4 閉会

<配付資料>

- | 資料  | 次第  |
|-----|---|
| 資料1 | 配席図   |
| 資料2 | 徳島文化芸術ホール（仮称）管理運営計画検討委員会委員一覧                |
| 資料3 | 徳島文化芸術ホール（仮称）管理運営計画（素案）に係るパブリックコメント<br>について |
| 資料4 | 徳島文化芸術ホール（仮称）管理運営計画（案）について                  |
| 資料5 | 徳島文化芸術ホール（仮称）主要諸室の整備状況について                  |

(藤野委員長)

皆さんこんにちは。早速議事に入りたいのですが、この中の委員の皆様も関わられておられる一般社団法人地域創造が、年1回素晴らしい雑誌を作っています。今回の特集が「ニューオープン」ということで、建て替えをした施設のかなり詳しい紹介がされています。私は1年前に視察に行ったのですが、秋田県と秋田市が県市協調で建てた「あきた芸術劇場・ミルハス」がオープンして半年経ちましたが、それまでのいきさつがかなり詳しく載っていたり、高槻市や那覇市の新しくできたホールも載っています。今、新しいホールのオープンラッシュになっています。いろいろ理由はありますが、バブル崩壊後、90年代前半にたくさんのホールができて、30年以上経ち、リニューアルするか、建て替えするか、かなり大きな選択を全国で迎えています。その中で徳島県が今回素晴らしいホールの計画をしているので、ぜひ実現に向けて進めていただければと思います。それでは議事1について、事務局より説明をお願いします。

(事務局)

資料3、資料4により、事務局から説明。

(藤野委員長)

説明ありがとうございました。一つはパブリックコメントの特徴的な意見を説明していただきました。もう一つは管理運営計画のブラッシュアップ、あるいは、少し書き直した部分を中心に説明をいただきました。これから委員の皆さんの意見をいただきたいと思いますが、パブリックコメントもかなり数があり、いろいろな意見が出ています。事務局の説明がパブリックコメントの結果からありましたので、こちらから意見ををお願いします。

まず、私からですが、すごく面白い意見がいろいろ出ていると思いました。番号で言うと、16番。観客の教育、お客さんを新しくつくっていくことは、本当に一番大切にしなければいけないというか、ベースの部分ではないかと思います。どのような方針で運営するにしても、一番基礎の部分になると私は考えています。

それから、21番の意見と29番の意見を比べてみると非常に面白いと思います。21番では「徳島ならではの言葉は、国レベル、国際レベルのホールを目指していることが明記されていないのではないかと書かれていますね。例えば、文化振興の基本計画を作るときも、「何々ならではの」と使われるように、日本では、「ならではの」という言葉がすごく好まれますよね。「ならではの」を、どのように考えるかということですが、個人的な考え方ですけども、文化芸術の場合は、二つの基準で見ていかなくてはならないと思います。二つの基準の間のバランスをどう取るのかということが、文化政策、それから、こういった施設運営にはとても重要なのではないかと思います。一つは、地域の「固有性」ですよ。「ならではの」という言葉に表せるような「固有性」です。ただ、その「固有性」が、例えば、「隣の市、隣の県と違う特徴はこうだよ」と言った途端に、今度は、「固有性」が並び、相互のユニバーサルな関係、共通の理解がなかなかできなくなってしまいます。競い合うような関係がいい形でできればいいのですが、敵対的な関係もでてきます。文化のすごく怖いところでもあって、言語とか習慣の違いによって、ウクライナとロシアのような問題が出てきてしまうわけですね。ですから、「固有性」にこだわ

りすぎないようにするため、やはり「多様性」を認める寛容さが重要で、そこは、文化よりもむしろ芸術の分野なのかなと思います。つまり、芸術はユニバーサルな「普遍性」に近く、文化は「固有性」に近いということで、私は理解しているところがあります。「固有性」もとても重要なのは確かですが、「固有性」という基準と、芸術の「卓越性」という基準、この両方の基準のバランスをとることが、文化施設の運営にとっても、文化振興の基本計画にとっても、とても重要なことではないかと思います。

今は少なくなりましたが、30年、40年前に新しい文化ホールができると、そのこけら落とし公演のために、ご当地ものの創作オペラとして、県民オペラみたいなものを作りましたよね。例えば、「トスカ」とか「アイダ」ではなくて、その地域の民話や神話、あるいは、そこにちなんだ作家の作品を使った創作オペラをつくりました。台本とか作曲料だけで何千万円とかけて、練習のためにも総動員して、億単位のお金をかけて公演をしますが、1回限りになり、他の地域には持っていけないです。こけら落としは、頑張っているのですが、1回公演しただけで終わってしまって、楽譜が市庁舎の奥に眠っているといた話をかなり以前に聞きました。ですから、あまり「固有性」にこだわりすぎてしまうと、「汎用性」がなくなってしまうのではないかと思います。他方、29番の意見もごもつともで、「地域の風土や歴史、産業、人々の暮らしとともに形成されてきた徳島の文化資源をプロデュースし、徳島の活性化につながるにぎわい創出事業を、ホールのメイン事業ととらえてもいいのではないかとあり、これも正しいですね。両方とも正解だと思うのですが、芸術におけるユニバーサル、世界に通用するというような「普遍性」とか「卓越性」の尺度の基準と、「固有性」を大切にす、あるいは「固有性」をさらに掘り起こし、育てていくという観点をどうバランスを取っていくか、それが大切だと思います。やはりこういった基本計画のレベルで、もう少し掘り下げていかなければいけないと思いますし、これから運営していく上で、館長、芸術監督を置くかどうかは分かりませんが、プロデューサー、あるいは芸術顧問のような方がいらっしやるとは思いますけれども、そういった方ときっちり議論して詰めていかなければいけないのではないかと思います。

(小澤委員)

実は、私も藤野委員長と同じことをパブリックコメントを見た時に考えておりました、徳島の方は、本当に郷土のもの、地元の文化を本当に知っておられて、楽しんでおられる方が多いんだなと感じました。しかも、それを「残してほしい」、「発信してほしい」という思いがとても強い方が多くいるという印象を受けました。一方、今徳島にないような、「新しいものを作ってほしい」、「国際レベルのものを作ってほしい」という、両極では無いですが、二つの意見があるなと実感いたしました。徳島県には、豊かな地域の文化があることと、劇場人といましては、劇場の箱は、しかも専用ホールではないということなので、そこで本当に多様な演目を上演することが可能な建物、空間になりますので、どちらに偏ることなく、地域の方々から求められているものを、多様性を持って取り組んでいくことが本当に大事だということを実感いたしました。新しいホールができることをとても期待されている、あるいは、次世代育成というところで、最近言われております持続可能性というところにつながっているのだと思いますが、次の時代に何を残していくかということにも多くの意見が寄せられていることがとてもいいなと思って、興味

深く拝見させていただきました。

(藤野委員長)

ありがとうございます。例えば、上田市の経験から、これに関係することありますか。

(小澤委員)

そうですね。上田市の場合は、地域の文化でこれを発信してほしいというものが、特になかったんですね。もう少し古い歴史というところで、真田氏とか、シルクとか、そういった関係の方の意見はあったのですが、深く根付いているものがなかったので、地域の何かを残してほしいということで、「創作」が一つのキーワードとして上がってきたということがあります。もちろん全国から、東京から発信されるようなものを買取りすることもありますが、上田では、地域ならではの創作もの、作品づくりに取り組んできました。開館して10年経っても、演劇やダンスになりますが、今でも、地域をテーマにした創作が続けられていますので、そういった事業をこの計画でも取り組んでいけるような内容が書かれるといいと思います。

(真田委員)

私も藤野委員長と同じようなことを感じていました。パブリックコメントでは、24人の方の意見でしょうか。県が行ったパブリックコメントの中でも多い方だということですが、恐らく今後このホールに関わる人と比較すると、少ない一部の意見なのかなという印象で捉えています。その中で感じたのは、委員として、手前味噌的な言い方になりますが、24人の方からいただいた内容の一つ一つは、結構、私たち委員も、視点を向けながら、議論を深めた部分ではないかなという印象を持っています。やはりこのホールに徳島の県民の皆さんが求めていることは、いろいろ違うのかもしれませんが、やはりホールができることで、今までに無いもの、新しく自分たちが享受できるもの、そういったものへの期待は間違いなくお持ちになっていらっしゃるかと改めて感じました。それを、どうしていくのかは、私たち委員がもう手をかけていくことができないので、これから実際運営していく組織の中で関わっていく人が結構重要になってくると思います。

それと、先ほど、上田市の話もありましたけど、私も「リ्यूーとぴあ」のオープニングのときに経験していることで、演劇の部分になりますが、オープニングで「ミュージカルを創作しましょう」となりました。なぜそういう考えになったかという、それまで20年近く市民の皆さんが中心になって、毎年1回、オリジナルの創作ミュージカルをつくる取組みが継続されてきました。新しい施設ができることによって、それをさらに充実させていくため、新しい施設の組織力、パワー面、財源力も活用して、その取組みをステップアップさせていこうという考え方に切り替えていきました。それは取り組んでいた団体とも話し合った結果です。その中で、まさしくご当地ものをやりたいという意見も出ましたが、プロデューサーだったり、芸術監督だったり、やはりそこに関わる人間がどういう考え方なのかによって、そのあたりの捉え方も変わってくると思います。そういったご当地ものに価値感がないというわけではないのですが、そういう世界で仕事をしている人は特にそうなのかもしれないですけど、商業ベースの意識を持ちつつ、残るソフトをどうつく

っていくかというところを結構考えました。ご当地ものは本当に1回だけということや、そのソフトが、例えば、東京で公演するとか、他の都市でも公演できるものなのかというような考えにも及び、ご当地ものをやらなかった経緯があります。これはきちっとした形で、当時の新しいホールをつくる責任者の方が説明に行って理解していただいています。その作品は、オープニングだけではなく、3回つくり直ししながら、上演してきました。ご当地ものでやっていたらどのような結果が出たかは分からないのですが、そういう切り替えの中で、当時関わった人たちにとってはすごく思い入れのある作品になっています。

それから、計画の中でも県民の皆さんの参加をすごく大切に考えているところがあると感じました。当然そうだと思いますし、そうあるべきだと思いますが、ただ、そこも捉え方で、当時、全国的に市民ミュージカルのような取組みがやられていたと思うのですが、新潟でミュージカルをつくるときにすごく意識としてこだわった部分は、いわゆる一般的な市民ミュージカルではなくて、市民が参加するミュージカルをやろうとしたことです。どう違うのかと思われるかもしれませんが、実は、プロの俳優何人かに入ってもらって、その人たちが市民の中に混じって一緒にやるという形になるわけです。要するに、目指すところを、どっちの方向に行くのか、ちょっとした考え方の違いですけれども、この新しいホールができたことで、これまでの市民、県民の皆さんが参加してきた取組みを、どういうところまで持って行けるのかという、できればそういうところも、改めて意識を持って、今後の計画を立てていただけたらというのが私の感想です。

(浅香委員)

徳島の文化資源をプロデュースするということで、徳島は、風流、いわゆるユネスコの無形文化遺産にも登録されている、そういった民俗的な意味での風流な国だと言われるぐらい、非常に特徴的な文化が残っています。

昭和30年代から60年代の高度成長期にかけて、亡くなられましたけども、徳島に舞踊家の榎瑛司氏という方がおられて、県内の各市町村で残されている民俗芸能をずっと調査されておりました。ご自身は舞踊家ですから、いろいろな形で、地域に残る風流とコラボレーションしていこうという考えを持っておられてました。

最近、「徳島県郷土文化会館」では、プロの和太鼓の団体ですけど、大きな和太鼓もあれば、小さな和太鼓もあって非常にいろいろな演奏をされるわけですが、阿波踊りとコラボレーションをしました。阿波踊りは行進型であるし、屋外、街で見かける、本来はそういうものですが、ところが、阿波踊りが変わったんですね。舞台での芸術として、阿波踊りそのものが変わってきました。それから、三味線の弾き方が変わってきました。テンポアップされ、ずいぶん違った弾き方になってくるんですね。こういった、プロの方と阿波踊りとがコラボレーションすることによって、新たな阿波踊りの魅力が発揮されたなという感じがしました。徳島の資源をプロデュースするということで、29番の方が書かれています、まさにそういうものが成功しましたね。阿波踊りを、徳島だけではなくて、他に持っていけるのではないかと、広がりを持つのではないかと感じました。そういう発想からすると、私は、徳島の無形文化財を今も受け継いでいる地域がかなりありますので、それを活かした形で考えていくと、面白いものができるのではないかと感じます。

(藤野委員長)

大変具体的な事例をありがとうございます。佐々木委員いかがでしょうか。

(佐々木委員)

期待が非常に大きいと感じながら拝見しておりました。実際に舞台に立ちたいという方の期待もすごく大きいと感じました。35番の「地域全体でどう受け入れるか検討の余地があるのではないか」という意見や、「愛称をつける」、「キャラクターを作る」、「工事の着工段階から、できるまでの工事現場レポートのようなものを定期的に見ることができたら」という意見があり、言い方が正しいか分からないですけど、やはり思っている以上に巻き込まれたいと言いますか、関与していきたいという県民の方が多くいらっしゃることを感じました。そういう興味関心をもっともっとうまく利用していき、県民からムードを盛り上げていくような取組みを今後考えていく必要があるのかなと思っております。

(吉本副委員長)

ありがとうございます。個別の意見については、皆さんからすでに出ているとおりでと思います。小澤委員がおっしゃっていましたが、「徳島の文化遺産をどうやってつくっていくか」、「発表していくか」ということに対する期待と、やっぱり「新しいものを見たい」とか、「劇団四季を呼びたい」とかありますよね。両方のバランスを取りながらやっていくことが大切だと思いました。

パブリックコメントについて、事務局の説明では、24人、96件は、県が行うパブリックコメントの中では、割と件数が多かったということですが、県民性なのか、24人は決して多いと言えないのではないかと思います。反対意見がなくて、基本的に期待とか、やってほしいということなので、それを大切にしたいと思います。ただし、今後、意見を出した方にどう対応されていくのか分かりませんが、期待されてもできないこともあるわけですよね。このパブリックコメントを出してくださった24人はとても大切な方だと思いますので、できないことも含め、丁寧に対応することが、これから重要になると思います。

(藤野委員長)

事務局から何かありますか。

(事務局)

今パブリックコメントの件数について、吉本副委員長からご発言がありましたが、整備のスタート時点で固めず整備基本計画があって、今回はソフト面の管理運営計画ということになります。類似ホール施設の手続きの場合、整備基本計画には非常に多くの意見が届いて、管理運営計画になると少し減るといのが多いパターンです。ただ、本県の新ホールの場合、整備基本計画が70件弱ぐらいのご意見でしたが、今回は96件ということで、流れでいけば少し地味になりがちな管理運営計画で、意見が増えているというところでは、やはりその中身を踏まえて非常に期待が込められたものなのかなと事務局でも感じしております。

今後の対応に関しまして、本日はいただいたご意見をお示しさせていただきましたが、通常、県のパブリックコメントの対応としましては、それぞれのご意見に対しての回答をまとめ、オープンにしていく形をとっております。さらにしっかり中身に目を通して、対応を進めていきたいと考えているところです。

(藤野委員長)

対応の方向性については、委員会で議論しなくてもいいですか。事務局で進めますか。

(事務局)

ご意見に対する考え方だけではなくて、やはりいただいたご意見を最終の計画にどう反映していくかという見通しも持った上で、お答えしていく形にしたいと考えております。

(藤野委員長)

一応、私たちも責任の一端はありますので、少なくとも委員長預かりとして、どのようにお答えするかだけは確認させてください。

では、管理運営計画ですね。補足説明、付け加えたところもありましたので、その点について皆さんの意見をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

(吉本副委員長)

第1、第2と順に、皆さんの意見を聞いたらどうかと思いますが、いかがでしょうか。

(藤野委員長)

そうでしょうか。それでは、第1からにしますか。

まず、「第1 管理運営計画について」、5ページまでですね。この範囲内で何かございますか。

(吉本副委員長)

5ページの一冊下③の「未来に向けた持続可能な施設運営を実現する」は、まさしくそのとおりですけど、ここで書かれている「効率的な手法」というところで、効率的に運営をするのはいいと思うのですが、少し分かりにくいと思いました。例えば、「効率的な運営を心がけ」とかの方がいいような気がしました。

それと、外部からの資金調達の前に、まずは、「チケット収入、入場料収入をできるだけ確保する」ということがあった方がいいです。

また、下のところで、評価のことが書かれていますけど、後ろの方で詳細な記述がありますが、「複層的な評価制度を構築する」というと、とても重たい感じがします。ここは、「評価を的確に検証する仕組みを整え、透明性の高い施設運営をします」とかにしてはどうかと思います。評価をしっかりやらなくてはいけないと思いますが、あまり重たいものになってしまうと先々大変なので、「しっかり評価しますよ」ということをしっかり伝えられるといいのではないかと思います。

(藤野委員長)

ありがとうございます。あまり意見が重なってしまうと答えにくい状態になるかもしれませんが、今の点について、事務局から何かありますか。

(事務局)

新しい施設をつくるにあたって、評価に対する我々の前のめりな文章になっているのかなと思いましたが、いただいた内容で反映させていきたいと思います。

(藤野委員長)

以前、上田の「サントミュージゼ」で評価がありましたが、すごくいい評価でしたよね。一つのモデルになるような気がします、何年目にやったのですか。

(小澤委員)

開館5周年としてやりました。

(藤野委員長)

それから、毎年内部評価はしているのですか。直営だから行政サイドの評価ですか。

(小澤委員)

上田市の場合は、5年目の事業評価の後、美術館とセットになり、運営協議会を設置しまして、毎年、複数回の協議会を開き、そこでいろいろと意見をいただいているということが続けております。ただ、5年目のような大規模な事業評価は、1年間でできることはありません。3年ほどかけてデータを集めてということをしておりましたので、2回目はまだ計画されていないという状況です。

(藤野委員長)

ありがとうございます。評価のところに話が飛んでしまいましたが、実際には26ページですね。「第5 検証と評価について」があって、まず基本的な考え方、実施の手法について①②③と書かれています。③に「外部検証・評価」ということが出てますね。ただ、毎年、外部評価を行うのは難しいですよ。私は、ある劇場や財団の外部評価の担当をしていましたが、コロナもあって挫折してしまい、毎年は本当に大変だと思いました。

それでは、その次の「第2 事業の展開について」ですね。ここは少しボリュームがありますが、6ページから13ページまでになります。このあたりいかがでしょうか。

(吉本副委員長)

前回の意見を踏まえて、よく整理していただいたと思います。その上での意見になりますが、まず、6ページ目の(1)主催事業の3行目のところですが、4つの柱の事業について元々関係があるとなっていますが、そうではなくて、むしろ「それぞれ個別に行うのではなく、密接に連携して展開していく」ということで、連携させることを書いた方がいいと思います。

それから、その下の貸館事業のところの2行目ですが、「申請」だと役所の申請みたいになってしまいますので、「申込」の方がいいと思います。

その下の「コンシェルジュ機能」のところは、貸館の場合も「技術スタッフが丁寧にサポートして良い舞台を作っていきますよ」ということだと思いののですが、ここでは「コンシェルジュ」と言わなくてもいいような気がします。例えば、「県民をはじめとした利用者が安心して利用できる環境を整えるだけでなく、より良い舞台作りや公演が行えるよう、積極的な支援を行うことで文化芸術活動の活性化等につなげていきます」というように、貸館の利用者にもしっかりとサポートしますということが分かるように書いた方がいいと思いますし、その方が利用する方々も安心するのかなと思います。

(事務局)

特に、「コンシェルジュ」のあたりが、県民の方に分かりやすい方向に持っていけるよう、反映させていただきたいと思います。見て分かって安心して期待していただけるというのが何より重要だと思いますし、次につながると思います。

(小澤委員)

修正の提案というわけではなくて、印象の話になりますが、主催事業の想定の中の具体的な事業展開の例として、「ホールプロデュース公演」とか、「参加型公演」を入れていただいているのが、とてもいいなという印象を持ちました。と言いますのも、前回から入れていただいた項目ではありますが、パブリックコメントを見ていく限り、こうした内容、希望を実現していくためには、「参加型公演」というのも必要になりますし、それを実現していくためにはやはり、「プロデュース公演」ができる機能、体制づくりがとても大切になってきます。ここで書いていただいていることが将来的に有効になっていくのではないかと思います。

一方で、先ほどの真田委員の意見にも、とても共感してしまったのですが、「参加型公演」、例えば、市民ミュージカル、市民参加演劇とかは、やはり消えもの芸術ですので、それをつくっていくことはとても参加して感動があると思いますが、一方で、参加型をやってしまったがために、市民の方が続けてきた継続性を断ち切ってしまう可能性もあり、悲しいことに全国でいくつか事例があったりもします。「参加型公演」をするにしても、「プロデュース公演」をするにしても、やはり地域の方と、地域のリサーチなどをしっかりと、この地域の文化、活動が今後発展していく手法でやっていくことが大切だという印象がありました。

(真田委員)

私からは、大きな指摘ではないですが、7ページの主催事業の想定というところで、(1)の2段落目で「新ホールでは、このような活動をさらに活発化させ、徳島ならではの新たな文化芸術を創造するため」という本文がある中で、具体的な事業展開の例の中の二つ目の最後のところに、「施設オリジナルの舞台芸術等のプロデュース作品を創作します」と書かれており、言いたいことは分かるのですが、施設オリジナルだとか、徳島オリジナルだとか、いろいろな言い方があって、そのあたりの捉え方を統一した方が県民の皆さんが

見ても分かりやすいのかなという気がしました。

(事務局)

伝わりやすいように表現の形を工夫していきたいと思います。

(吉本副委員長)

7ページの稼働率のところですが、2段落目の記述が気になりますが、「100%に近づくほど利用料金収入の増加につながる一方で、効率的なスタッフ配置が必要になる」というところで、効率的なスタッフ配置というよりも、100%だったらスタッフがどんどん必要になるということですね。それは、実際無理ですので、例えば、「増加につながる一方で、安心安全な施設管理やスタッフの適切な労働環境の確保と配置、施設メンテナンス、公演の会場選びに向けた下見等」というように、「安心安全な施設管理」とか、「スタッフの適切な労働環境」ということを加えたほうがいいと思います。

それから、70~80%の数字ですが、今の書き方だと、100%に近づく方がいいけど、他の施設の実績から、70~80%を想定して、目標稼働率はまた令和5年度以降に改めて示しますということで、70~80%より高い目標をつくることが想定されているように読み取れてしまいます。70~80%以上は物理的に難しい数字ですから、ここは「70~80%を想定します」と言い切ってしまった方がいいと思います。ちなみに、県民の意見の中に「週1回の休館は多い」とありましたが、その必要性を理解してもらうためにも、はっきり書いた方がいいと思います。

それと、具体的な事業展開の例のところですが、順番入れ替えて、やはり「ホールプロデュース公演」を先に書いた方が、私はいいのではないかと思います。もちろん、「参加型公演」も重要で、パブリックコメントの中でも両方の意見がありましたが、館の姿勢として、全国の公共ホールの状況を考えると、「参加型公演」が一番出てくると、とても消極的な印象がしてしまいます。まず、「プロデュース公演」を出して、作品をしっかりつくりますと、最初に謳ったほうが姿勢としていいのではないかと思います。

それと、細かいところですが、2段落目に、最先端技術のことが書かれていて、おそらくLEDのことだと思いますが、「徳島の誇る最先端技術を活用し」と言ってしまうと必ず活用することになってしまうので、「活用を含め」としてはどうでしょうか。LEDの設備をどれぐらい入れることを想定しているか分かりませんが、徳島ならではのものをぜひやっていただいたらいいと思いますけど、それを明確に書きすぎると設備コストなども大変になりますので、含みを持たせた書き方がいいのかなと思いました。

(佐々木委員)

9ページ目の「にぎわい創出事業」のところですが、「憩いの場」ということが入れられています。パブリックコメントにもありましたけど、やはりこのにぎわいを発信していくというようなニュアンスを入れた方が、「まちづくり」という点では強化されていくのではないかなと思いました。

(藤野委員長)

ありがとうございます。このあたりの「にぎわい創出事業」は、後で出てくる組織体制のどこが担うのかと、また、地域連携とかそういった問題で出てくるかなと思いますので、また検討したいと思います。

(吉本副委員長)

8ページの「次世代人材育成事業」のところは、とても大切な事業ということで書かれていると思うのですが、(2)の下の本文のところは、どちらかというところと舞台に立つとか、観るとか、支えるという感じの人材育成になっています。アウトリーチのことは、下の具体例には出ているのですが、アウトリーチを行う意義を上にも書いた方がいいのではないかと思います。例えば、3段落目の一番最後に加えればどうかなと思っていますのは、「文化芸術に触れたり体験したりすることが、子どもたちの想像力、イマジネーション、創造性、クリエイティビティを育み、コミュニケーション能力や主体性、思考力や判断力の向上につながることから、ホール内での事業にとどまることなく、特別支援を含む学校現場でのアウトリーチに取り組みます」というように、アウトリーチに取り組む意義と目的を一緒に書いた方が、なぜこういうことをやるのかということが明確になるのではないかと思います。

それと、「鑑賞機会提供事業」のところ、4行目の一番右側に「幅広いジャンルの」と記載があるのですが、この文章を通して、アウトリーチ以外では「演劇」という言葉は1回も出てきませんよね。それから「舞踊」も1回も出てこない。幅広いジャンルと言いながら、必ず「音楽」か「舞台芸術」になっていますよね。「音楽」に力を入れようということがあるかもしれませんが、どこかに「演劇」や「舞踊」などのジャンルのことを書いた方がいいと思います。具体的には、9ページの「文化芸術ファン拡大に向けた取組み」のところ、3行目に「音楽」や「舞台芸術」の公演となっていますが、例えば、ここに、「音楽や演劇、舞踊、ミュージカル、伝統芸能など幅広い舞台芸術公演を実施します」と書いたらどうでしょうか。「演劇」や「ダンス」、それから「日本舞踊」、「伝統芸能」も、徳島では盛んだと思いますし、多分「ミュージカル」を観たい人は徳島にもいるのではないかと思います。パブリックコメントでも「劇団四季を呼んでほしい」とありますけど、「ちゃんと自分たちが観たいものやってくれるんだね」というのは、この幅広い「文化芸術のファン拡大に向け」のところにあつたらいいなと思いました。

(藤野委員長)

「音楽」と「舞台芸術」とくっっていますが、もちろん、「舞台芸術」の中に「音楽」を含めることもありますよね。でも、「音楽」は特出しし、あと残りの「舞台芸術」は何なのかと。親しみのある人はどんなジャンルが入るか分かるのですが、ぱっと見た時に分かりにくいと思います。例えば、後ろの用語集の中で、「舞台芸術」には、こういうジャンルがありますみたいなことを書いた方がいいのではないかと思います。

(小澤委員)

少し話が戻ってしまいましたが、7ページの稼働率のところは気になっています。

規模の小さな音楽ホールと比べて、今回のホールはスペックが高く、吊り物も多い構造からしますと、やはり70～80%という数字を見ると、どうしても施設管理をしている私たちからすると、危険水域のように思ってしまう。安全面の確保に向けて、やはり様々な点検が必要ですし、例えば、午後まで借りられて、夜間に貸し出すことを制限しなくてはいけないとか、安全面の確保のために、稼働させないことが結果的に出てくるのですけども、そのことによって、大きな吊り物構造の劇場は、稼働率が落ちてくるというところがございます。目標稼働率という表現でなくて、安全な稼働率というような方が、私たち運営者としては安心感があります。それが何%なのかは、スタッフ体制とか、組織づくりとセットになってきますので、全国的にこうだというのはないですが、そのあたりが4、5年経ってくると見えてくるのかなという印象があります。

(藤野委員長)

ありがとうございます。稼働率の定義ですが、練習に使うとか、仕込みに使うとかは、普通はカウントに入れて稼働率出しますよね。だけど、お客さんから見ると、例えば、演劇公演で3日、4日仕込みがあるので、「週末しか空いてないではないか」ということがありますよね。音楽の場合は、比較的、当日一発でいけるので、「毎日やっていますね」ということになりますが、そのところが誤解されやすいので、稼働率の定義もどこかに入れた方がいいと思います。

(吉本副委員長)

しかも、一日単位の稼働率にするのか、利用時間別の稼働率にするのかというところで全然違ってきて、小澤委員がおっしゃるように、夜空いていても、昼は埋まっている場合、その日は稼働している計算になりますね。そういうことを含め、稼働率は数字で出てくるので、目標数字を書きしてしまうと、良い面と悪い面の両方があるので、誤解を与えないようにする必要があると思います。

(藤野委員長)

それでは、その次の「第3 施設の管理について」ですね。ここもかなりボリュームがあります。14ページから23ページのところですが、お願いします。

(吉本副委員長)

14ページの組織体制の1段落目の2行目の最後から「多様な雇用形態による効率的な人員配置」とありますが、ホールで働く人から見ると、このままでは、有期雇用とか、3年契約とか、あるいは、非正規とかの雇用をイメージしてしまいます。そのような雇用形態では、経験が蓄積しないとか、今、多くの現場ですごく問題になっています。この書き方は誤解を生むのでやめた方がいいと思います。具体的に書くとすると、「専門知識を有する人材を確保し、長期的な取り組みや人材育成の可能な雇用形態を整え」というように書いていただくと、「このホールだと安心して働けるね」と思ってもらえると思います。優秀な人材の確保につながると思うので、ここは言葉遣いを慎重に選んで記述していただけたらと思います。

あと、前回議論になったと思いますが、「40人程度」というところがどうしても気になっています。「想定」というよりは、「目安」という言葉の方がいいのではないかと思います。「想定」というと、これを前提にやっていくようになってしまうので、「目安」ぐらいの書き方でどうでしょうか。それから、委託を除いているということですが、清掃、警備の他に、舞台技術も委託になる可能性があると思うので、このあたりが本当に難しいのですが、例えば、「40人程度のスタッフ数が一つの目安になりますが、この数字には舞台技術や清掃、警備、設備の保守点検などの外部委託のスタッフ数は含まれていないため」とし、その先、「今後」という整理にして、40人という数字を出すことが先々足かせにならないような書き方にした方がいいと思いました。

それと、同じパートの最後の段落ですね。「開館の数年前から段階的に整えていくことを検討します」となっていますが、この検討という言葉は、魔法の用語ですけど、このあたりはこれからここで働いてもらう方々へのメッセージになると思いますので、できれば「段階的に整えていきます」と、県の意志をはっきり出していただいた方がいいのではないのでしょうか。

(藤野委員長)

ありがとうございます。おっしゃるとおりです。多様な雇用形態による効率的な人員配置というのは、これによって、なかなか人材育成ができなくて、特に中堅、管理職的な人がいないということが大きな問題になっています。多様なのはいいと思いますが、加えて、安定的な雇用形態によると。効率的ではなくて、効果的の方がまだいい気がしますね。とても重要なセンテンスですが、他にいかがでしょうか。

(小澤委員)

細かいことになってしまいますが、19ページの利用時間のところで、「早朝の仕込み、夜間の撤収なども想定し、延長利用にも柔軟に対応できるよう検討します」というところは、もちろん柔軟に対応していくのだろうと思いますが、拡大解釈というか、自由に捉えられると、管理が行き届かなくなります。柔軟には対応するのですが、延長料金とか、そういったところは必要なのではないかと感じております。

あと、これが地域のルール、周辺のホールとかあるかもしれないですけど、20ページの利用期間の例で、大ホールと小ホールの希望日の月が13カ月前と12カ月前に分かれているので、このあたり混乱される可能性がありますので、ここでここまで細かく書いておくのかなという気がします。

あと、21ページの利用料金の基本的な考え方のところも、まだ決まっていないと思いますが、利用料金の額を決めるにあたって、一つは、ホールの大きさの単位は、やはり「席」だと思います。「席単価」がいくらかということも計算しておかないと、今後、改修とか、新しいホールができたりとか、そういった時に、金額設定が不明確になってしまう恐れがありますので、大きさの単位が「席」だという視点も必要かもしれないですね。

(吉本副委員長)

今、小澤委員がおっしゃった部分で、21ページに他ホールの料金がありますけど、一

番右側に「席単価」を書くということですよ。

それと、15ページの「専門性の確保」のところですが、1段落目に「より高い専門性を求めます」とあり、2段落目も「求めます」となっています。県が指定管理者に求めますという感じだと分かるのですが、県の計画なので「求めます」というと他人事のような印象に感じます。あと、専門性の他には経験もあった方がいいと思うので、例えば、1段落目の最後は、「より高い専門性を踏まえた経験者を起用します」とか、県の意志としてどういう方針かが分かるようにした方がいいと思います。

それと、次の「マーケティング」や「ファンドレイズ」の記載内容は、確かにそのとおりですけど、一般的な印象でいうと、「マーケティング」というと、商品を売るという感じがしますので、公共ホールの場合、この言葉を使うのがいいのかどうか、微妙なのではないかと思います。例えば、「マーケティング」や「ファンドレイズ」あたりのところは、「チケット収入をはじめとした事業収入の拡大、公的助成金や補助金、民間協賛金などの外部資金の確保なども含めた」というように、具体的に何をやるのかということを書いた方がいいような気がしました。

あとは、3段落目の最後のところで、「配置を検討します」となっていますので、「プロデューサー等の専門家、経験者を配置します」と、言い切れるなら言い切ってしまった方がいいかと思います。スタッフ育成のことが書かれたのはとても良かったと思います。

(事務局)

言い切りの部分は、検討という言葉がぼやけるという指摘だと思いますので、事務局の姿勢といいますか、県の取組みが読んだ皆さんに伝わりやすい表現として、言い切りが適切ということであればそうしますし、しっかり考えさせていただきたいと思います。

(真田委員)

15ページになりますが、(3)にある「管理者に求める能力」のこの管理者というのは、例えば、個人の、トップの責任者を指している管理者なのか、それとも管理をする組織的な捉え方なのか気になっています。実は、次に書いてある「以下の能力が求められると考えています」というのを自分と照らし合わせて考えていった時に、「こんなにすごい人がいるのかな」という思いを持ってしまいました。ただ、責任者の方がいらっしゃって、組織体的で、いろいろな役割分担があって、それらを統括するという意味合いとして捉えると、少し気が楽なのかなという思いで見えていましたので、その点で捉え方をお聞きしたいと思いました。

(事務局)

この管理者は、特定の人というよりは組織として能力を求める、そのような意味で書いております。

(真田委員)

そうであれば、そういう受け止めができる形にした方がいいのかなという気がします。代案は出せないですけど、それだけ気になりました。

(藤野委員長)

指定管理者制度はそうなんですよ。法人をイメージして、どういう法人にお願いするかということですよ。

(吉本副委員長)

真田委員と同じところが気になったのですが、管理者に求める能力となっているので、例えば、「管理者が備えるべき能力」とか、「管理者が備えるべき資質」とかの言い方がいいような気がします。それと、これが指定管理者のことを指しているのであれば、1段落目の最後のところが「以下の能力を備えた管理者の起用を考えています」とかになるといいと思いました。

あとは、その下の管理運営手法の2段落目の最後のところも、「管理者には多様な能力をバランス良く持つことを求めます」とあり、指定管理者のことなので当然だと思いますが、県の姿勢として書くには、「指定管理者には多様な能力をバランスよく持つことを求め、適切な運営体制を整える」というように、県の姿勢をしっかりと書いた方が、計画の文章としては適切かなと思いました。

(小澤委員)

大きいことになってしまいますので、入れられるかどうか分からないですけど、「管理者に求める能力」、15ページから16ページにかけてのところですが、上田市や、あと、昨年度から私がお手伝いしている大分県竹田市のような市町村立のホールからしますと、やはり県立施設の管理者の存在は大きいですよ。ここで、連携とありますが、やはり県立施設の管理者には、連携以上の役割を期待しているところがありまして、県立施設から情報とか、サポートが出てくる県と、市町村立ホールにあまり見向きしていない県では、その市町村の活動が変わってきます。県立施設ですので、連携というか、一步先の情報提供や、活動の支援とか、そういったところまで求めてしまうところです。

(藤野委員長)

近隣施設だと、市内のいろいろな施設をイメージしてしまいますけど、実際には県内のいわゆる基礎自治体の様々な施設の連携を、県レベルの劇場だったらやるべきということですよ。そのあたりはしっかりと書いた方がいいのではないかと思います。

(吉本副委員長)

19ページの一番上ですけど、「営業時間」は、「開館時間」の方がよくないですか。

それで、利用者はお客さんなので、「利用を求めていきます」ではなくて、「利用をお願いしていきます」だと思います。

その次の、早い利用時間のところも、先ほど、小澤委員から意見がありましたので、どこまで対応していいかあると思いますが、もう少し丁寧に書くとすると、「早朝の仕込みなど早い時間帯からの利用や、夜間の撤収なども想定し、延長利用にも柔軟に対応できるように」の方がいいと思いました。

それと、19ページが一番最後のところで、同時申込のことを書かれていますが、要す

るに、とにかく柔軟に対応してできるだけ利用者の希望に沿うようにしますということだと思います。次の20ページ目の利用決定方法のところも、最終的には抽選とか、先着順だとか、すごく細かく書いてあるのですが、ここまで書く必要があるのかなと思いました。先々、具体的な運用方法を決めていくことになると思いますし、具体的にはホールに申込があったりした時点で調整できることがあると思います。ここはとにかくきめ細かく対応して申し込んだ人に一人でも多くの希望するような形で、貸館の利用決定を行うということが本来書きたいことだと思いますので、あまり細かく書き込まない方が逆にいいような気がしました。⑤⑥ぐらいはあってもいいかなと思いました、③④あたりはもう少し簡潔でもいいような気がします。

(藤野委員長)

これどういたしますか。私もすごく具体的なところと、あえて今の段階で決められるけど書き切れていないところと、両方あるようなので、かえって不審に思われるようなこともあるのではないかなと思います。でも、設置条例を作るときに必要なものもありますので、どこまで具体的にあったらいいですかね。検討をまたお願いします。

だいぶ時間が過ぎておりますが、次に「第4 収支について」、「第5 検証と評価について」、「第6 その他」ですね。このあたりをお願いします。

(吉本副委員長)

まず、24ページの収支のところですけど、第4のタイトルの「収支について」というのがすごくぶっきらぼうな気がしますので、例えば、「運営財源と収支について」ぐらいの方がいいような気がしました。

それで気になったのが、24ページの一番上のところですね。書かれていることはそのとおりですけど、今の書き方だと、「差額に対して指定管理料が充てられています」ということで、実態はこうかもしれないですが、これだと「赤字を補填します」ということになってしまいます。指定管理料は安定的な運営のために絶対必要なものですので、丁寧に説明した方がいいと思います。それで、1行目の一番最後のところから少し文章を考えてみました。「下記のような収入や支出によって、施設の管理運営が行われておりますが、事業収入や利用収入だけではホールの管理運営や事業に必要なすべての経費を賄うことは難しく、適切なチケット料金や施設利用料で安定的な運営を行うためには、指定管理料などの公的な資金を投入する必要があります。それを文化に対する投資と捉え、県民への文化の提供、県民の文化環境の向上を図っていきます」とするか、「指定管理料は、足りないから要ります」ということは絶対やめていただきたい。これは絶対必要ですので、県民がこのホール、施設をしっかりと利用して、しかも適切なチケット料金で、それで安心安全に運営するために指定管理料は無くしてはならないものだというところを、この中で説明をしておいた方がいいと思いました。それと、「収支形態」という言葉も気になっていて、「収支構造」の方がいいような気がします。

あと、2段落目の公立文化施設協会のデータのところですが、この書き方も、例えば、頭に「実際」と付けて、最後の方は「その差額は設置団体の指定管理料を充てるだけでなく、外部資金の獲得に取り組んで必要な運営財源を確保しています」として、「他のホールで

はそういうことを当たり前のようにやっていますよ」ということをしっかり書いて、「このホールでもこういうことやっていきます」ということが見えた方がいいと思います。

それと、その下の表と、表の文章のところですが、今、指定管理料が一番下になっていて、この方がいいかもしれないと思いつつ、指定管理料は無くってはならない、基本だと思えますので、そうであれば、指定管理料を一番最初に出して、収入においては、指定管理料があって、次が、入場料収入という方が私はいい気がします。ただ、指定管理料を一番最後にするというのもあると思いますが、それは上の方をしっかり稼ぎますよという意味ですね。県の判断でいいと思いますが、そのあたりも感じたことです。

それと、最後に、「その他」として出ていますけど、「安全性確保」とか「災害対応」は、「その他」で付け足しになってしまっているのが気になります。書くとしたら、「第3 施設の管理について」の、例えば、「組織」の後、「管理運営手法」の前とかはどうでしょうか。安全や災害対応は、基本中の基本だと思えますので、「その他」ではなく、項目を立てて、「安心安全と災害対応はしっかりやります」ということをこのあたりに入れた方がいいのではないかと思います。そして、「施設の管理運営に際しては、安全性を最優先し、昨今の自然災害の増加にも対応しながら危機管理を含め、県民や利用者に安心安全に利用していただける体制や運用方法を整えます」ということを頭に入れて、この二つの項目が入ってくる流れがいいと思います。

それと、文章表現の問題だと思えますが、(1)の2段落目に「また、重量物が可動できる状態で上部に設置される」とあり、そのとおりですけど、例えば、「舞台上部への重量物の吊り下げや、転落事故につながりかねない奈落など」というように、県民の方は、すごく危険な場所だということが分からない方も多いいと思いますので、そういうものがあるんだということを具体的に書いた方が、説明としていいのかなと思います。

(藤野委員長)

28ページの「その他」は、一般的には、「リスクマネジメント」の項目で入れると思います。この管理運営計画は、全般に、アドミニストレーション的な感じが強い気がします。行政がやるとこのようになるとは思いますけど、一般的にはアドミニストレーションとマネジメントはタイプが違います。私が勤める大学は公立大学ですけども、経営系でも言いますが、管理という言葉なるべく使わないようにしています。マネジメントとか、運営よりも、経営の方が分かりやすいような気がします。ただ、公費が入っているので、公共経営です。そこをどのように理解していただくかというのが重要かと思えます。

(吉本副委員長)

26ページの「検証と評価」。ここは冒頭のところでも出てきたのですが、ここの書きぶりは工夫をした方がいいと思います。まず、1行目の最後に「効果性」とありますが、「公平性・透明性のみならず効果や成果の把握が求められる」ぐらいでどうでしょうか。

それから、実際に評価する時に、例えば、入場者数は、最初に目標とか基準を示して、それを達成したかどうかというところで判断しないといけないので、「1万人入った。なんで1.1万人ではないの」みたいなことがよく起こるんですね。ですので、2段落目の検証評価あたっては、「それ自体を目的とするのではなく」の次に、例えば、「達成す

るべき目標や基準を明確にした上で」と入れたらどうでしょうか。そうでないと運営する人は大変になると思います。もっともっと多く多くなってしまうので、基準を最初につくって、それを達成するかどうかを評価することにしなないと厳しいのではないかと思います。

それと、「実施手法」というところは、「実施方法」ぐらいの方がいい気もします。手法だと、非常に技術的なニュアンスがします。あと、冒頭で申し上げたのと同じですが、一番最後の文章ですね。「仕組みを構築」と言うと少し大袈裟な感じがしますので、「体制と仕組みを整えます」ぐらいでどうでしょうか。

(藤野委員長)

ありがとうございます。まだ「ここが足りない」とか、「こう書き直したほうが良いです」というのがありましたらぜひ出してください。

(小澤委員)

私からも「第5 評価について」のところですが、吉本副委員長がおっしゃられるとおり、評価は、数値の目標ばかりになってしまうことは、一番よくないという印象を私は持っています。数値を追い求めるがために、役割にかける部分のマンパワーであったり、経費を削ぎ落としてしまって、事業評価で評価される数値ばかり追い求めてしまい、10年、20年で役割の評価がなくなってしまうことになるのは一番避けたいと思います。かなり工夫して書いてくださっていると思いますが、どうしても評価の時は、数値の方にどんどん目がいってしまいます。役割に対する評価をどうするかは、一番難しく、なかなか手法的にも今、日本国内ではなかなか定着していないとか、始まっていないところですので、今後、役割の活動をどう評価するかというところの視点も入った方がいいのかなと感じました。

(藤野委員長)

どうやって伝えたらいいと思いますか。

(小澤委員)

評価の仕方としては、やはりインタビューとか、アンケートとか、様々な手法があると思いますが、ここでの書き方はなかなか難しいと思います。そこは、具体的なアイデアはないですが、定性評価のところなので、物差しづくりというところが難しい印象は持っております。定量評価はどうしても数字が独り歩きして行って評価されるのですが、定性評価はどこまで行っても説明が必要な評価になってしまいますので、公共ホールの評価では、弱いのかなという印象を持っております。

(吉本副委員長)

この文章の中にも、「『文化芸術』が数値で測りにくい領域を多く取り扱う」と書かれていますので、役割の評価というのは、「このホールはこういう役割を担います」とか数値で評価できないことがあるということですよ。それも評価の中に仕組みに入れるとなる

と、先ほども申し上げたように、達成すべき目標あたりのところに、この施設の役割と照らして評価するとか、そういうことを入れておくといいかもしれません。数字だけになってしまうと、どうしても小澤委員がおっしゃるように、「この数字が達成できた、できていない」となってしまいますので、そこはぜひ入れてほしいです。

(藤野委員長)

評価の手法は、本当に私もずっと悩み続けているところで、吉本副委員長のように専門的にやっているわけではないですけど、例えば、「兵庫県立芸術文化センター」が2005年にオープンしました。開館して3年経ったときに、定性評価をやってほしいと私の研究室に依頼がありました。「定量評価は、調査会社をお願いして、もう数値化できてます。ただ、その質を担保するために評価してください」と言われたんですね。議論を重ねながらやりましたが、やはりインタビューはすごく重要で、考えられるあらゆるステークホルダーに対するインタビューをしました。大きなところで評論家ですね。評論家10人ぐらいをお願いして、「兵庫県立芸術文化センターの事業内容、例えばコンセプトとか、どうですか」みたいなことを、結構インタビューをしました。それから、利用団体に対するインタビューをしました。さらに、西宮のまちづくりを重視していましたので、西宮のいろいろなお店の方とかにもインタビューをして、今よく使われてる「文化的commons」が、ホールができたことによって、どうやって形成されてきたのか、ネットワークがどのように生まれ、つながってきたのかという、そういったところを検証することに結構注力しました。

公開できるものはあまり無いですけど、「公共文化施設の公共性」という本の中で、それをやったチームの、私の研究室の若い仲間たちが、少しアウトプットを出していますので、そういうものを参考にさせていただければいいかなと思います。他にいかがでしょうか。

(吉本副委員長)

全体的なところですけど、この管理運営計画は我々の意見も含めて、本当に配慮すべきことが網羅されていて、これを作るのに相当ご苦労されたと思いますが、一方で、藤野委員長もおっしゃっていましたが、エクスキューズというのですかね、先送りしますみたいな、実際先送りにしないと決められないこともあると思いますが、全体的に「あれもやるけどこれもやります」というところがすごく多くて、どうしても県の明確な方針が見えにくいと感じました。

表現のことですけど、特に私が気になったのは「何々とともに」というのがすごく多いんですよ。日本語として「ともに」と書かなくてもよかったり、別の言い方もできるので、全体読んだ時に、方針がしっかり出ていない感じがします。もちろん今出せないこともあると思いますが、出せるところは、県としてこれでやりますと言い切りにして、管理運営計画でしっかり明示した方が先々のことを考えてもいいかなと思いました。

あと、この管理運営計画の使われ方、役割がいろいろあると思います。まず、この管理運営基本方針を定めるということと、県民の方にどういうホールなのか説明するということだと思いますが、その他にも、財政当局に対する説得材料として使うという面や、専門家を起用する際の説明文書にもなると思います。そういう人達に対して、「徳島のホール

は面白そうだな、ここでやってみたいな」という、そういうメッセージを出せるものにしていただきたいです。それと、実際動き始めた時に、「ここにこう書いてありますよね」と、プロデューサーの方とかが事業や運営の根拠にするということも考えられます。管理運営計画で固めることで、いろいろ縛りになることもあるし、逆に活用できることもありますので、どこまでそれを想定して作成するかということがあります。私はこれが公表されることで、県民の皆さんがどう受け取るかということと同時に、ホールで働く人に対するメッセージになるような文章にさせていただけたらいいのではないかなと思います。

(藤野委員長)

時間がなくなってきましたので、このあたりでよろしいですか。ありがとうございます。それでは、議事2ですけど、事務局から報告がありますか。

(事務局)

資料5により、事務局から説明。

(藤野委員長)

ありがとうございます。壁面で支えるのではなく、柱で支える構造で、あのような細い柱で大丈夫なのかなと気になります。

(事務局)

柱自体はあくまでスラブというか、テラスを支える部分になります。外観も一見ガラスに見えますけど、1周して行く時に、お気づきになられたと思いますが、相当屈強な躯体がしっかり備わっています。そこで強度を持ってがっちり受け止めて、ガラスですとか柱の部分はあくまでもまっすぐ上の物の重さだけを支えているような形です。今、設計を進めているところですが、テラスとテラスの間のスロープや階段、これも実は単なる通路ではなくて、それぞれの揺れの伝達ですとか、強度に役立つようにしています。よくある筋交いを、効率的なアクセスのために極力減らしたいということで、単純に経路を考えて階段やスロープを作るというのではなくて、それ自体が1個の構造体になるような置き方をされていて、できるだけシンプルにしています。耐震強度などは、必要以上にしっかりと確保する方向性で進めております。

(吉本副委員長)

すごく透明感があるデザインですね。採択案が公表されたときには、分からないところがありましたけど、こうやってCGになるとすごくイメージも分かるし、期待が持てました。恐らく建築的にも相当話題になると思います。これが実現できたら、建築の専門家はじめ、一人でも多くの人に知ってもらいたいです。見学の申込は山のように来るでしょうから、最初から料金取ったほうが良いと思います。スタッフは大変ですから、必ず料金は取ってください。「観賞ツアー」とありましたよね。建築系の人は見たくて仕方がないと思います。

(藤野委員長)

絶対、観光名所になりますね。

それでは、今後のスケジュールについて説明をお願いできますか。

(事務局)

資料4により、事務局から説明。

(藤野委員長)

ありがとうございます。ただいまの説明で、何か質問はございますでしょうか。

(吉本副委員長)

ご説明ありがとうございました。スケジュールのところで、開館は令和8年度中ということで、よく見ると開館記念事業とかありますが、開館時期が分かりづらい気がします。それと、開館準備の業務のところで、概ね3～2年前に指定管理者を選定して、2～1年前に管理者の運営体制の整備をするとなっています。指定管理者のことを考えるとこうだと思いたいますが、前から申し上げているように、ここで中心的に働く人は、2年前、1年前に決まったのでは絶対遅いんですね。この中には書き込めないかもしれませんが、できれば、この管理運営計画が固まったら、すぐに準備室を立ち上げて、そこで主要な方を、雇用は難しいと思いますけれども、先々このホールで働いていただくことを前提にですね、何人か集めてスタートしていただきたいと思います。その時に中心となるのは、プロデュースをする人と、後はテクニカル人材ですね。これから設備や備品をどんどん決めていくことになりますが、それを決めるのは、結構専門知識が必要ですし、そこで実際に使う人が責任を持って決めていかないと、「なんでこれが入ってるの」とか、「なんでこれが無いの」みたいなことが必ず起こります。ソフトだけではなくて、テクニカルの責任者。非常に重要ですので、1日でも早く見つけていただきたいと思います。

(藤野委員長)

おっしゃるとおりですね。変更もそこで必要になってきます。できてからでは遅いという話にならないようにしていただきたいと思います。他はよろしいですか。

ありがとうございます。今日は白熱した議論をありがとうございます。本当はもう少し時間を取った方が良かったと思います。今回は6回目、最後の委員会となりました。今後、管理運営計画案の修正がある場合は、恐縮ですが、私一任ということでよろしいでしょうか。事務局とのキャッチボールでいろいろ決めさせていただきたいと思います。

それでは、ここからまた事務局にお返ししたいと思います。